The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	源氏物語文体攷 ： 「うし」「心うし」を中心に
Author(s)	中川, 正美
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42815
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

氏　　名	中川正美（なかがわ まさみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　16396　号
学位授与年月日	平成13年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	源氏物語文体攷　－『うし』『心うし』を中心に－
論文審査委員	（主査） 教　授　前田　富祺 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　教　授　伊井　春樹

論文内容の要旨

本論文は、源氏物語を対象として、文学作品の文体を語彙論を基礎として導き出したキーワード、「うし」「心うし」から考究しようとするものである。本論文は「はじめに」、序論「形容詞からみた平安仮名文の文体」、本論「「うし」「心うし」からみた源氏物語の文体」、「おわりに」からなる。(400字詰原稿用紙換算　800枚)

「はじめに」では、源氏物語に作品としての個別的な特徴が存するかどうかの検討を要すると指摘し、作品の語彙の計量的な分析だけにとどまらず、文学の内容に踏み込んで、語の意味用法を検討する必要があると述べている。

序論の第一章では、八代集と万葉集とを比較し、特に形容詞の使用語、使用順位、用法から平安和歌と万葉集との違いを明らかにし、第二章では、源氏物語の散文部分に三〇例以上みられる形容詞一五一語が、先行作品にも認められることを確認して和文の形容詞と考え、和文の形容詞は和歌の形容詞を包含していることを示し、和歌に用いられない和文特有の形容詞から和文の特徴を考察した。第三章では、源氏物語と先行和文作品との使用の多寡を、第四章では紫式部日記との使用の多寡を作品の長さから調査し、源氏物語は美意識においても用法においても、先行作品や紫式部日記とは異なっていることを指摘し、作品としての文体を考えることができるとする。第五章で、文学作品の文体を考えるには語彙研究を基盤とし、さらに細やかに語の用法に分け入る必要があると述べ、源氏物語で、歌ことばとして多用され和文にも取り入れられていく「うし」と、「うし」から派生し専ら和文に用いられている「心うし」をキーワードと考えられるとした。

本論の第一章では平安和歌における「うし」の語義用法について論じている。第一では、「うし」が和歌特有の意味を担った歌ことばとして形成される過程を、第二では、「うし」と掛けられる景物を分析し、第三で歌ことば「うし」の語義は事態を認識しての無力感であると論じている。第二章では平安和文における「心うし」の語義用法について論じている。第一では、同じ素材で同じ構成の共通話でも、平中物語には大和物語・今昔物語集・十訓抄にみられる「心うし」が認められないことを指摘し、第二では、宇津保物語や枕草子の用例から「心うし」は口頭語であったとするが、落窪物語では地の文に多用して対立関係を表し、主題につながる表現としていると指摘し、第三では、口頭語の「心うし」を地の文に早くに用いた蜻蛉日記について述べている。

第三章では、源氏物語における「うし」「心うし」の語義を類義語と比較して探り、物語における役割を考察している。第一では、「うし」は「ものうし」に対して状況を総合的に認識した結果の嘆きであり、「心うし」は「つらし」に対して、個人的に共感し信頼する相手に裏切られたときの瞬間的な反撥であるとする。第二では、「うし」「心うし」

の使用の偏りに注目し、第一部では「うし」と「心うし」で女君を造型し分け、第二部では「心うし」の有無で事件に対する反応を分けていると述べ、第三では、続編での「うし」「心うし」による人間関係を探っている。そして、第四章では、源氏物語における「うし」「心うし」の用法を先行の和歌和文と比較して源氏物語の独自性を探り、本論のまとめとしている。

最後に「おわりに」を置いて全体をまとめ、今後の課題にもふれて締めくくりとしている。

論文審査の結果の要旨

「文体」という用語には、漢文や仮名文というような文章様式に認められる類別的な特徴を言う場合と、ある作者や作品に認められる文章の個別的な特徴を言う場合とがあるが、従来の国語学的文体論では文の長短や品詞比率から文章様式を比定する研究を主としていた。文学作品の個性を表す美意識や主題を解明する研究、文学作品の文体を客観的な立場から考察する研究は著しく立ち後れている。

そのようななかで、本論文は、表現主体の意図を端的に表し、かつ、現在より種類も豊富で多用されている形容詞を取りあげて、語彙論の観点から文学作品の文体の考察を展開していこうとしているのである。

序論では、先行の和文作品や紫式部日記と源氏物語とを比較して、源氏物語には作品としての個別的な特徴が存しており、源氏物語の文体というテーマが成り立つことを検証してキーワードとなる語を選定している。本論で、その語義や用法、類義語との使い分けを和歌や和文の先行作品と比較して源氏物語の文体を考究していくという、類別的研究から個別的研究へと段階を踏んだ考察を行っている。

ここでとった方法は、文体研究に一つの新しい方法を示したものと言えよう。その正否は今後に俟つところであるが、本論文で述べられたところに注目すべきところが多い。

源氏物語が歌集や先行の和文作品、また紫式部日記と比較して、語彙的に（特に形容詞の用法）に特色のあることを示したところも興味深い。「うし」「心うし」が諸作品において、また源氏物語においてどのように使われているかを、場面や人物の造型と合わせて明らかにしたところも高く評価される。

もちろん、今後に残された課題のあることも当然である。歌の語彙というものを文体論の中でどう位置付けてゆくかにも問題があろう。またここに取り上げていない語においても、「うし」「心うし」などと同様に考えてゆく事が出来るかどうかも問題である。しかし、本論文がこれまでの研究の遅れていた分野の研究に一つの方法を示したことは高く評価されよう。このような次第で本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。